

〈編集部だより〉

●「RIVER FRONT」誌は、センターの広報誌として、センターの設立とともに歩んできており第24号で丁度満8年になった。

本誌は、リバーフロントの水辺情報と所内広報の性格をもった2つの役割りを果たすこととしている。小生が本誌とは第3号～23号までの7年間編集に携わり、本号から直接担当から外れることとなった。

この機会を利用して本誌について簡単に振り返ってみると、当初の頃は、リバーフロントという活字が社会的に認知されていなく、リバーフロントはウォーターフロントのマイナーぐらいに軽く扱われ、ウォーターフロントばかりであった。

リバーフロント関係は、もっぱら制度、施策、河川環境整備事例を紹介する程度で主に世界のウォーターフロント開発の手法や開発事例を掲載した。当センターの設立時のメイン業務の一つであった「ふるさとの川モデル事業（現在はふるさとの川整備事業）」の整備事例が紹介できたのは第5号（平成元年5月）の安春川（札幌市）であり、また多自然型川づくりが本誌に最初に登場したのが「ヨーロッパにおける多自然型河川工法について」と題し第7号（平成2年2月）であった。

平成3年頃には、センターの調査研究成果のとりまとめが多くなり、この成果の一部を広く紹介しようと本誌の編集の見直しを図り、第16号から調査研究の成果を重視した内容で現在まで経過してきている。

特筆としては、「万葉の川心」を第5号（平成元年5月）からシリーズものとして川にちなんだ万葉集の歌を純真のところで解説し、本誌を柔らかく調和させている。執筆者の船田先生に感謝致します。

編集責任者であった立場から、今後も本誌へのご意見やご協力をお願いするとともに本誌の円滑な発行のため、原稿執筆者は、「字数」と「締切り期限」を厳守するようご協力をお願いを致します。（Y.N）

●この頃河川の現場にゆくことが多くなって気に掛かることの一つに堤防の芝のことがあります。芝で覆われた堤防は少なく、おおむね雑草で覆われています。堤防は治水を目的として作られた施設で、古来から芝が張られてきた目的は、のり面を流れる雨水などにみず道を造らせないこと、芝の縦横に走る根張りの強い地下茎によるのり面の保護、さらに快い緑の景観の保持などにあるとされています。雑草で覆われた堤防は、主たる目的を十分に果たせない可能性があるように思われます。

芝の堤防を保全するためには、一般に芝は後3年間程度の養生期がとられ、その後永続的に続く管理期間の作業として、芝刈り、雑草抜根、草刈り、ところにより除草剤散布、施肥、芝焼きなどの雑草管理が重要です。芝は一見全く不可思議と思えるほどの再生力を備えていて、刈り込みの頻度を増すごとに分けつが促されるといわれており、一方雑草は頻度の多い刈り込みにより防除される傾向にあるとされています。

何人かの方にご意見をお聞きしました。「雑草化は、刈り込み回数の経年的減少に原因があるのではないか。刈り込み回数を試験的に増やしてみたら芝に戻ってきたところもある。」「地域の人々の中に芝よりも雑草の多様性を好む人がいる。」「堤防にもいろいろな草が生えていた方が自然でよいのではないか。」など様々でした。どう考えて、どうすればよいのか自分でも考えてみようと思っています。

本号から小誌の編集事務を担当させていただくことになりました。7年間の前任者の足跡をふまえて、より親しまれる機関誌をめざしたいとかがえます。みなさまのご指導とご協力をお願いいたします。（N.T）

